

2014年度 センター試験 倫理(本試験) ワンポイント解説

第1問	問1	片山潜は、キリスト教的社会主義者で、議会制に基づく社会主義や普通選挙を唱え、コミンテルンにも参加した。
	問2	「納得度の平均点数」からAを選択した場合もBを選択した場合も、もう一方を選択した場合よりも納得度が高く、逆転はしていない。
	問3	(ア) エリクソンは、自分が何なのかわからず、生きている実感を抱けない状態をアイデンティティの危機〔自我同一性の拡散〕と呼んだ。(イ) オルポートは、自己意識の拡大・他者との暖かい人間関係・情緒的安定と自己受容・現実認知・自己客観視・人生観などを、成熟したパーソナリティの特徴と考えた。(ウ) マズローは欲求階層説を唱え、欲求は〔生理的欲求→安全の欲求→所属・愛情の欲求→承認・自尊心への欲求→自己実現欲求〕の順序に発展する、と主張した。
	問4	引用文の読み取り問題である。センからの引用文には、「国際企業が民主国家よりも独裁国家での活動を好むのは公正な発展の後戻りである」とあり、ゆえに民主主義の確立が重要となる。また、「識字率の低さの改善よりも経営者などの便宜が優先されている」と批判しているので、教育の拡充の必要性が主張されている。
	問5	ロールズは、平等な自由の原理・公正な機会均等の原理・格差原理(自由競争によって発生した格差は、社会的弱者の救済に向けられるべき、という格差是正の原理)を主張した。
	問6	サン＝シモンは空想的社会主義者である(なお、コントは、人間の知識は〔神学→形而上学→実証主義〕へと発展するという「三段階の法則」を唱えた)。フェビアン協会とベルンシュタインは、ともに武力革命を否定して議会制に基づく漸進的社会改革を唱えた。
	問7	(イ) アメリカの海洋生物学者レイチェル＝カーソンは、『沈黙の春』で生態系の破壊を警告し、『センス・オブ・ワンダー』で自然の神秘に驚嘆する感性の復権を説いた。(ウ) 1992年に開催された地球サミットでは、「持続可能な開発」が提唱され、環境保全と長期的発展は相互補完的であるとされた。
	問8	①レヴィンの境界人(マージナル＝マン)は、児童期と成人期の中間にある青年を指す。②シュプラングァーは、人間を追求する価値によって理論型・経済型・審美型・社会型・政治型(権力型)・宗教型の6つに分けた。人間を内向型と外向型に二分したのはユングである。③抑圧や退行などは防衛機制であり、これらが原因となって心の安定を乱すのではなくて、心の安定を取り戻すのである。
	問9	①カウンター・カルチャー(対抗文化)は、大人や既成の文化に対抗する青年独自の文化である。②ノーマライゼーションとは、障害者・健常者・老人・若者のすべてが同じ市民として社会で生きられるよう環境整備して共生することをいう。③パターンリズム(父権主義)とは、父親が子供の利益になると考え世話するように、何かと干渉することである。
	問10	Aは、市場での取引ルールを破らないことが公正であるとして、市場と別の仕組みが必要だと言っておらず、また市場経済の発展を通じた社会全体の富の増大にも言及していない。またBは、寄付よりも貿易の方が息の長い援助(持続性に配慮した援助)になるとし、価格競争では適正対価が支払われないと懸念している。以上を満たすのは③である。
第2問	問1	アリストテレスは、両極端を避けた中庸を選ぶ習慣(エトス)を形成し、それが性格(エートス)となってはじめて倫理的徳が完成すると考えた。
	問2	ストア派の始祖ゼノン(不動心)・「自然に従って生きよ」・世界市民主義(コスモポリタニズム)などを説いた。

	問 3	①イスラム教によれば、ムハンマドは最大かつ最後の預言者であって、ムハンマド以降は、預言者は出現しない。啓示とは神が自らを顕すことであり、ここでは神が預言者に言葉をもって語りかけることを意味すると考えられる。最後の預言者であるムハンマド以降は、啓示が伝えられる人間はいない。
	問 4	①心齋坐忘とは、心から分別の働きをなくして空虚にすることであり、一説には中国の禅宗に影響を及ぼしたとされるが、絶対神と一体となることではない。②「小国寡民」は老子の思想である。④「浩然の氣」は孟子の思想である。
	問 5	①荀子は礼による統治を説いた礼治主義である。③四苦は生老病死であり、愛別離苦（愛する者と別れなければならない）は八苦の内容である。④問答法を実践したのはソクラテスである。
	問 6	（ア）パウロは、欲してもいない悪をなす人間が救われるのは、律法ではなくて信仰によるという信仰義認説を説いた。（イ）アウグスティヌスは、パウロの信仰義認説を発展させ、人間には善をなす自由はなく、悪へと傾く自由しか持っていないと考えた。（ウ）イエスは山上の垂訓で「裁くな、裁かれないためである」と主張している。
	問 7	八正道とは、正見（正しい見解）・正思（正しい思考）・正語（言葉遣い）・正業（正しい行為）・正命（正しい生活）・正精進（正しい努力）・正念（正しい見解を念じて記憶しておくこと）・正定（正しい瞑想）である。
	問 8	大乘仏教の理論家ナーガールジュナ（竜樹）は、「すべて存在するものは固定的実体を持たない」という空の理論を主張した。また大乘仏教の菩薩は、「一切衆生が救われない限りは自分も救われない」という菩提心を持ちつつ、悟りを求めて努力する求道者を指す。
	問 9	本文では、第二段落で「欲望に囚われてしまうと、人としての理想的な生が送れなくなる」とし、第三段落では「欲望の抑制は…他者を隔たりなく受け止めようという思いともつながっている」のであり、「自己中心的な欲望を離れることで、自他の隔たりをも超える隣人愛や利他的実践が実現される」とあるので、該当する選択肢は③である。
第3問	問 1	神道と仏教の融合なので「神の前で（＝神道）読経（＝仏教）」であるとわかる。また、ヒンドゥー教の「仏や菩薩が衆生救済のために種々の姿で現れる」という権現（ごんげん）思想が、「仏が衆生救済のために日本の神々の姿で現れる」という本地垂迹説と合体した。ここでは、〔権現思想＝本地垂迹説〕と考えるとよい。
	問 2	①は市聖（いちひじり）とも呼ばれた空也であり、②は慶滋保胤（よししげのやすたね）である。③は時宗の開祖であり捨聖（すてひじり）と呼ばれた一遍である。④源信は、『往生要集』を記し、観想念仏を説いた。
	問 3	（ア）吉田兼好の『徒然草』は、無常観を積極的に評価したものとして著名である。（イ）世阿弥の『風姿花伝』は、「花」「幽玄」について述べた能楽論であるが、一般芸術論としても通じる。（ウ）千利休は、簡素な茶（華麗な茶でなく）であるわび茶の完成者である。
	問 4	②は石田梅岩、③は契沖、④は安藤昌益の著作である。
	問 5	農業は、天道（自然の営み）と人道（人間の働き）から成り立ち、天地・君・親・祖先による恩に自らも徳をもって報いるという報徳思想を説いた。それを具体化したのが分度（経済力に応じた合理的生活）と推譲（儉約によって生じた余裕を他人に譲り、また将来に蓄えること）である。①は、天地の恩も自覚すべきであるから間違いである。③は、雑草などすべて生命を慈しむというのが間違いである。④は、植物を見習うという箇所が間違いである。

2014年度 センター試験 倫理(本試験) ワンポイント解説

第4問	問6	(ア) 鈴木正三は、臨済宗の僧で、あらゆる職業に専心することが仏行となるという「職分仏行説」を説き、またキリスト教批判も精力的に行った。(イ) 熊沢蕃山は、中江藤樹の「時処位論」を政治経済に関する具体的考察に向けた点に特色があり、またその治山治水論は先駆的な環境保護論として有名である。
	問7	①は、柳田国男である。③は、折口信夫である。④は、田中正造である。
	問8	和辻哲郎からの引用文では、「自己了解は、寒さ暑さを感じず『主観』としての『我れ』を理解することではない」「寒さとの『かかわり』においては、我々は寒さをふせぐさまざまな手段に個人的・社会的に入り込んで行く」とあり、「孤立感」(①)に触れておらず、「我々が、忍従的かつ受容的な存在である」(②)とも述べておらず、さらに「自然を客観的に捉えることを学ぶ」(③)とも記してはいない。寒さを感じる時には、人は体をひきしめたり着物を着るのであり、それ以上に子供に着物を着せたり老人を火のそばに押しやるのであって、「個人であるとともに共同して生きる存在でもある」(④)ことになる。
	問9	①伝統的自然観が環境破壊をもたらしたとは記述されていない。②明治以降の近代科学の移入により、自然を法則的に捉えて開発するようになり、自然に対する敬意は薄れている。④各時代の自然観が、外来文化を受容することから自国文化の批判を通じて形成された、とは記されていない。
	問1	レオナルド・ダ・ヴィンチは「万能人」として有名である。
	問2	①は、アダム・スミスの自由放任思想である。②は、マキャベリの道徳と政治を分離した考え方である。④は、ホッブスの社会契約説である。
	問3	①は、デカルトの高邁の精神説である。③は、ベーコンの種族のイドラ・「知は力なり」の思想である。④は、ピコ＝デラ＝ミランドラの『人間の尊厳について』の内容である。
	問4	「わが上なる星の輝く空(＝自然法則)と、わが内なる道徳法則」は、『実践理性批判』の結びの言葉であり、墓碑銘ともなった。また、カントの『判断力批判』では、美的判断・崇高・合目的性などが論じられ、目的論的世界観が展開されている。
	問5	ゲーテからの引用文には「科学的な視点」(①)に関する言及はなく、動物と植物の区別(③)にも触れていない。また、花と昆虫、花と露の玉、花と花瓶は「自然のあり方に反するもの」(②)ではなく、「自然の有り様に従って」(④)のものであると考えられる。
	問6	マルクスは「存在(下部構造)が意識(上部構造)を決定する」と考えた。①では、「土地や工場など生産活動に必要なものをもつ人々と、そこで働くだけの人々との関係」が下部構造に相当し、「政治や芸術など人間の精神的な営み」が上部構造に相当する。②は、ベンサム功利主義である。③は、ヘーゲルの弁証法である。
	問7	①は、ルソーの文明社会批判論である。②は、キルケゴールの主體的真理説である。③は、デューイの創造的知性や民主主義的教育論である。
	問8	サルトルの論敵でもあったカミュは、『シーシュポスの神話』で、世界や人生には何の意味もないという不条理説を唱えた。
	問9	第四段落では、「想像力の働きは美の創造にとどまらない」で、「理性の分析とともに…現実と異なる理想を構築」するものであり、「現実を批判」することもでき、「現実社会と無縁ではなく」とあるので、①の「社会的な問題を解決することには貢献できない」は間違いであり、③の「理性の助けを借りなければ役立つものではない」とも矛盾し、④の「過酷な現実であっても、想像力によりそこ(現実)から離れて」いくものでもない。